吸血鬼な彼女

植木 薫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吸血鬼な彼女

【Ｎコード】
Ｎ９６０１Ｇ

【作者名】
植木　薫

【あらすじ】
自称、変なものが視えるだけの普通な高校生、鑢坂遊馬（やすりざかあすま）と自称、ちょっと血が好きなだけの女子高生、九十九もずく《つくももずく》のコンビが過ごす、変わってるようで変わってない、そんな日常。

01　prologue（前書き）

初投稿です。とにかく、しっかりと続けていこうと思ってます。
最初は説明ばっかりでつまらないかもしれませんがよろしくおねがいします。

01　prologue

その頃の記憶は無いので、生まれた時からかどうかは分からないが、物心というものがついた時には既にソレは視えていた。

ある日、母さんと散歩している時にソレを視たので、

「あそこにいるね。」

と指を指して言うと、母さんは難しい顔をして、

「そう、あなたにも視えるのね。」

そう言って、すぐに祖母の所へ俺を連れて行った。

祖母曰く、それは妖（アヤカシ）というもので、大小様々なのがいるらしい。そのほとんどが、ただの靄（もや）みたいな形を持たないような奴らで（実際、俺が視ていたのもそんなのばかりだった）、ヒトに何かをしたりできないくらい力が弱いやつらしく、形を持っていたとしても、せいぜい蟲程度だと言っていた。

普通の人には視えないので関係はないが、視える人にはそういうのが寄って来やすいらしく（気がどうとか言っていた）、ある程度対処法などを知っておかなくてはいけない、ということでしばらく祖母の家に泊まることになった。

うちの家系には、視える人が現れやすいみたいで母さんも視えるらしい。

対処法と聞いて、それっぽい呪文を唱えるのだろうかと思い、少しワクワクしていたが、そんなものは一切なかった。

ただ毎日、数時間祖母の家の道場で黙想をするだけだった。

こんなものがなんになるのかと思い、祖母に聞くと、

「妖相手に一番やっちゃならんのが、目を合わせることや。目と言っても顔についとる目だけやない。心の目もや。やから、心を静めて合わさんようにするんや。」

と言われ、納得してしまった。

ところが、いつのまにか修行の一環だとかなんとかで（何故か修行になっていた）、炊事・洗濯・掃除その他もろもろをやらされていた。今思うと、それを信じ、律儀にこなしていた自分はなんて純粋だったのだろう。

そのせいか、おかげかは分からないが、とにかく俺は小学生になる前から、パーフェクトな主夫だった。

まぁ、そういうことばかりだったわけではなく、対処法を含めいろいろなことをやっていた。

妖の中にもまれにではあるが、力の強いのがいるらしく、そういうのに出会ったら一目散に逃げろと言われた。そういうのはどうしようもないらしい。また、そういうのは魂を喰らうとかどうとか。

そうして半年ほど祖母の家で過ごしてから家に帰った。

その後は祖母の家で習ったことを活かして、妖関係のトラブルにも巻き込まれることなく、家事を担いながらただの子供として暮らしていた。

そうして、たまに変なものが視えるけどそれ以外は全くもって普通な高校生になって2年目のことだった。

俺は彼女の秘密を知ってしまった。

正直に言って全く知りたく無かった。

02　九十九もずく

ヤバい、本能が告げている。

逃げなくちゃ、そう思うが、捕らわれたように足が動かない。

俺は人生最大のピンチにたたされていた。

今日は遅くまで部活があったので、俺は急ぎながら走って家に帰っていた。

既に時刻は9時を過ぎていて、辺りは真っ暗である。

家にはお腹を空かした母親が待っているはずだ。

遅くなった場合には何か作って食べるよう言ってあるが、電子レンジを充電器か何かと勘違いし、携帯をチンしてしまったこともあるような親だ。

まともに何か食べている可能性は皆無だろう。

唯一の希望は店屋物くらいだ。

なんてことを考えながら、少し近道をして帰ろうと思い人気の無い路地に入り、時計をちらりと見てから前を向いた時だった。

そこにソレはいた。

いつからだ？
時計を見る前にいなかったのは間違いない。こんなやつを見逃すはずがないからだ。
ソイツは真っ黒で1つの目を持った蜘蛛の形をしていて1メートルほどの大きさだった。その程度のなら今までに幾度となく視てきた。
ただソレが他と違っていたのはなんというか、オーラのようなものだった。圧倒的なまでの威圧感をソレは出していた。

いつから？
どこから？
どうやって？

そんな疑問はそいつと迂闊にも目が合った瞬間に吹き飛んでしまった。

祖母の教えでは、目を合わせることが一番やってはいけないことだったが、
いや、いきなり音も無く出てくるような奴とどうやって目を合わせないようにしろと。

とにかく、今俺の頭の中にあるのは戦うなどではなく、逃げるという選択肢だけだった。

こんなのに立ち向かう術など俺は知らない。

しかし、逃げようとしても冷や汗が流れるばかりで、まるで地面に縫い付けられたかのように足は動かない。いつの間にボス戦になっていたのだろう。

目を合わせたまま、ソレは8本の足を器用に動かしながらじわじわと近づいてくる。

目を反らした瞬間にでも喰われそうでさえある。

え？何これ？もしかしてＢＡＤ　ＥＮＤ？

どっかで選択肢間違えた？

んー？死亡フラグを立てた記憶は無いのだが。

彼女が現れたのは、そんな今にも死にそうな状況で現実逃避をしている時だった。

「ん？何かと思って来てみれば…、そこにいるのは鑢坂（やすりざか）君かい？何だか大変そうだね。もしかして蜘蛛は苦手なのかい？」

見えてないので確信は持てないが、俺はその声と喋り方に聞き覚えがあった。

…というか、ほんの数時間前まで聞いていた。

「その声は九十九か！？なんでこんなとこに……ってお前もしかして、視えるのか！？」

「そんなことも知らなかったのかい？全く、これだから君って奴は…。いったい君の頭の中には何が入っているんだい？」

そう言って彼女がため息をつく音が聞こえた。

何というか、ひどい言われようである…。

本当は、こんな悠長な会話をしている場合では無いのだが、目の前のソレは彼女の登場に驚いたのか、足を止めている。

俺とソレが止まっている中、彼女は何故かそのままツカツカと俺の前まで歩いて来た。

こんな状況ではあるが、やっぱりと言うべきなのだろうか、その長い黒髪を持つ彼女は、

九十九　もずく《つくも　もずく》だった

「いや、九十九、お前視えてるんなら逃げろよ！分かるだろ、そいつはヤバいって！」

「ふっ、私がこの程度の妖に喰われると言いたいのかい？でも嬉しいよ、君が私のことをそんなに心配してくれていたなんて。胸に染み入って、ただでさえ大きい胸がますます大きくなってしまいそうだ。全くこれ以上大きくなったらどうしてくれるんだい？」

そう言って、九十九はその大きい胸をタフュンと揺らしながら、胸を張った。

「そんなわけあるか！どうしたらそんな考え方になるんだよ！なぁ、

こんなこと話してる場合じゃないんだよ。ほんとヤバいんだって。胸の話なら今度いくらでもしてやるから、逃げろよ、勝てるような相手じゃないって。」

今喰われてしまえば、話すことなどできなくなるのだが、そんなことを考えている余裕など、全く無かった。

だが九十九は俺の言ったことなど聞こえて無いように、

「そんな大事な友達の君を助けたいのだけど、右手と左足が機械のお兄さんと全身鎧の弟の兄弟や、
必要の無い人には入れないお店に住んでいる、次元的なものの魔女さんが言ってるように、
この世界は等価交換なのだから、君を助ける代わりに私のお願いも叶えてもらうことになるが、それでもいいかい？いいよね鑢坂君。」

と言ってきた。

「お前は一体何を言っているんだ？俺にも分かるように説明してくれよ。うん、いや、本当分からないんだって。」

そう言い返すと、

「ＯＫしたね！！今したね！！」

そう言って興奮していた。

「おい、待て一体俺に何をさせる気だ！それよりも今の『うん』は承諾の意味じゃない！お前はどこの悪徳業者だ！」

だが、九十九はまた無視してソレに飛びかかって行った。
あいつはどれだけ都合のいい耳を持っているのだろう。

圧倒的というか、圧巻だった。

九十九がソレの足に手を添えて少し力を入れるだけで足が小枝のように折れていき、
九十九がソレの腹に足を乗せるだけで腹がメゴォォォとへこんだ。
そうする度にソレの欠片は霧消していき、気づくと5分も経たないうちにソレは完全に消えていた。

何だろう。この圧倒的なまでのスペックの差は？
まるで、戦闘ヘリでかかしを攻撃するかのようだ。

当の彼女はご機嫌な様子で鼻歌を歌っている。

いや、九十九お前は一体何者だ？

そうしていると、不意に九十九はこちらを向き、笑顔で

「さぁ遊馬、対価をもらおうか？」

そう言ってきた。

おおぅ、ソレがやられる様子にあぜんとしすぎてすっかりさっぱりきっちり忘れていた。
笑顔の九十九は正直可愛いが、対価の内容が恐ろしい。

何がくるのか全く想像できない。
いつの間にか名前で呼ばれてるし。

そして彼女は笑顔のまま、こちらに近づいてくる。

怖い、怖すぎるぞ九十九。

彼女が一歩進む度に一歩下がっていたが、周りの家の塀に当たり、ささやかな抵抗もすぐに終わってしまう。
本日2度目のピンチである。

「落ち着け九十九、とりあえず落ち着こう九十九、深呼吸だ九十九。対価ってなんだ?何を求めているんだ?俺達友達じゃなかったか?なんだ?もしかして見せかけだったのか?心の中では『へへっ、美味しそうな奴だ、いつ喰らってやろうか』的なことを考えていたのか?今日弁当をくれたのも『ぐへへっ、いい感じに肥ってきたぜ、そろそろ食べ頃か』っていう伏線だったのか?」

7個もハテナマークを使うくらい俺は動揺していた。
「いや、私は別に『ヘンゼルとグレーテル』のお婆さんなわけではないが。というかまず君が落ち着きなよ。取って喰おうってわけではないんだから。少しチクってするだけだよ。そんなに怯えることは無いさ。」

何故この後に及んで不安を増長させるようなことを言うのだろう？

九十九はそのまま怯える俺の首に腕を回し、目を閉じながら頬を赤く染め、瑞々しい唇を薄く開き、俺の顔の方に近づけてきて、

「いただきます。」

そう言って俺の喉元に噛みついた。

噛みつかれた時は痛かったが、すぐになんだかフワフワした気分になった。

それから彼女が口を離すまで実際は数秒だったが、俺にはだいぶ長く感じられた。

「ごちそうさま。」

そう言って彼女は口を離した。

少ししてから我にかえる。

「……いや、お前何者だよ。」

「何ってちょっと血が好きな普通の女の子さ。」

「いや、俺の知る普通の女の子は血なんか好きじゃない。」

動揺のあまり７２０度程回って冷静になっていた。

「てかそれって、吸血ｋ

「違う！！！ちょっと血が好きなだけだよ！！」

「いや、だからそれが吸け

「違うんだって！！おばあちゃんはそんな感じだったが私は違うんだ。」

いわゆるクォーターというものらしい。

「日光を浴びても皮膚は焼けないし、ギョーザも食べられる。こんなことしたって大丈夫なんだよ。」

そう言って彼女は大きな胸の前で人差し指をクロスさせた。

涙目で必死に訴えてくる彼女がかわいそうでもあったし、貧血気味で疲れていたので、もう何でもいいや、と考えることを諦めた。

「あー、分かった分かった。お前はただ、血吸うのが好きなだけな

んだな。」

「なんだか適当な感じだけど、分かってくれたならそれでいいよ。」

「とりあえず聞きたい話とかもあるけど遅いし、疲れてるからまた明日学校でな。」

そういうと、何故か彼女は笑顔になって、

「あぁ、また明日。」

そう言って走って帰ってしまった。

余計なことに首をつっこんでしまったな、と思うが、とりあえず今一番大事なことは、家に帰ってこんなフラフラな頭で晩飯をどういようか、ということだった。

０２　九十九もずく（後書き）

正直３話目以降の話をほとんど考えてません。そのせいで、いつの間にか全く違う小説になっているかもしれません。早速あらすじとかも変えてるし。まぁそれでも頑張っていきたいと思います。

０３　九十九もずく　２（前書き）

感想・評価をもらえると嬉しいです。

03　九十九もずく　2

いつものように、目覚ましでセットした時間より数分前に起きる。
アラームがなる前に目覚ましを止め、顔を洗うために階下にまだ少しぼーっとした頭のままで降りていく。

なぜかもの凄くお腹が空いている。

あれ、なんでこんなに腹が減ってるんだ？

晩飯はどうしたっけ？

…ああそうか、疲れてたから帰ってそのまま玄関で倒れたんだ。

あれ、どうしてそんなに疲れてたんだっけ？
だんだん頭がスッキリとしていくにつれて、昨夜のことが思い出される。

いやいやいや…、ありえねえ、あるわけがない。あんなことが現実で起こるはずがない。

あれはきっと夢なのだ。
そう夢なのだ。

フロイト先生やユング先生が見たら深層心理学とかなんとかに元づいて、きっと何かしらのエロチックな精神分析をするに違いない。

そうさ、九十九はきっと今日も早くから一人朝練をするために学校

の弓道場にいるのだろう。
それならば、俺も早く学校に行って、朝から弓に励んでいる九十九に向かってテンション高くこう言うのだ。

「やぁ、九十九おはよう。今日も君は可愛いくて胸が大きいね。ますます大きくなってきたんじゃないかい？それよりも聞いてくれよ。昨日君の夢を見たんだ。知っているかい？昔の人は夢に異性が出てくると、その人は自分に惚れていると考えていたらしいよ。もしかして君は僕に惚れているのかい？照れるじゃないか、ＨＡ☆ＨＡ☆ＨＡ。」

…いや、誰だよこれ。自分で考えておいてなんだが、正直寒気がする。俺は決してこんな変態チックなキャラではない。
なんて現実逃避は洗面所の鏡を見た瞬間崩れさった。
俺の首元には明らかに何かにさされたような２つの痕があったからだ。

まぁ、そんな夢オチみたいな話があるわけないよな、と分かっていながら軽く希望を持ってしまった自分に苦笑しながら顔を洗い、リビングに向かう。

リビングには死体が転がっていた。
何なのだろうこれは？

本当は分かっているが…

その死体はこちらの気配を感知したのか起き上がり、キョンシーというよりはゾンビのような足取りでこちらに近づいてくる。

Gとか T 的なウイルスにでも感染してしまったのだろうか、ひたすらに

「…お腹空いた、食べ物。…お腹空いた、食べ物。」

と繰り返している。

ただ、そのゾンビは俺を食べる前に力尽きて、倒れてしまった。

部屋に運んであげるべきか考えていると、

「おはようございます、兄さん。母さんは私が運んでおきますので、朝食の準備をしてもらえませんか？昨夜は私も何も食べてないので…。」

入り口からそんな声がした。

振り返ると、そこには妹がいた。

鑢坂　夏々夏（やすりざか　ななか）1つ下の妹で、全国でみてもかなり偏差値の高い女子校に通っており、勉強・スポーツ何をやらせてもそつなくこなす、兄の目から見てもかなりできのいい妹である。

……家事以外は。

うちの女どもはどうしてこうも家事能力が皆無なのだろう…。

後、付け加えるとするならば、夏々夏は妖が視えない。

「あぁ、おはよう。すぐに朝飯の支度するから、母さん頼んだ。」

ちなみに、現在夏々夏に引きずられているのは、ゾンビもとい我ら兄妹の母である。

鑢坂（やすりざか）　五季（いつき）職業、某雑誌編集長。職場では『休み無き鬼』と呼ばれ、作家と編集者の両方から恐れられているらしいが、家ではその片鱗すら見せない。

昨夜に炊飯器をセットしていなかったので、当然ご飯は炊けておらず、しょうがないなと思いながら、棚から取り出したパンをセットする。

合わせのスープを作っていると、役目を果たした夏々夏が来たので声を掛ける。

「そんなに腹減ってたならなにか食べにでも行けばよかったのに。」

「いえ、私はそうしようと言ったのですが、母さんが『嫌だ、私は遊馬の愛情の込もった料理が食べたいんだ！』と言ったので一人食べに行くわけにもいかず…。」

…なんてわがままな親なんだろう。

まぁ仕事で忙しく、なかなか帰ってこれないため、せっかくなんだからと思う気持ちも分からないではないが。

「そうか、それは悪かったな、夏々夏。」

「いえ、そんなことよりも兄さん。」

「ん、なんだ？」

「どうして昨日は帰って来た途端倒れ込むように寝てしまうくらい疲れていたのですか？母さんと違って兄さんを運ぶのは、なかなか大変だったんですよ。」

…さて、何と言おう？

正直に言ってもいいとは思うが、心配をかけてしまう気がする。落ち着け、ここは冷静に行くんだ。

「ちょっと弓道部の練習が大変だっ
「嘘をつかないで下さい。」

簡単にばれてしまった。

しょうがないので九十九が吸血鬼というところは省いて簡単に説明する。

「そうだったんですか、それはすいません。その九十九さんという方に私の分もお礼を言っておいて下さい。」

「ああ、分かったよ。伝えておく。それにしても珍しいな、お前がこんなに聞いてくるなんて。」

「……昨日玄関に倒れていた兄さんを運んでいた時にですね、

（あれ？何だろうこの雰囲気、凄く嫌な予感がする。さっきまでの

和やかな雰囲気はどこへ行ってしまったのだろう？どこからスタンド攻撃でも受けているかのようだ。）

兄さん重いな、なんてことを考えてたんですよ。

（夏々夏は静かに話しているだけなのだが、妙な威圧感がある。）

そうしてふと首元を見たら何か恋人同士がよく付け合うような赤い印が、あるじゃないですか。あれはなんなんでしょうか？
よかったら、私にも分かり易く教えてもらえないでしょうか。」

「それはきっと蚊だ。うん、何だかかゆいと思ってたら蚊に刺されてたんだな。」

「…今は春ですよ。」

「き、きっとせっかちな蚊だったんだよ。ほ、ほら、あわてんぼうのサンタクロースだっているじゃないか。」

「そうですか。では兄さんは、お腹の空いた母さんと私をほったらかして、その九十九さんとやらと、あーんなことやこーんなことをしていたというわけではないんですね？」

なんというか、あらぬ方向に勘違いして疑われていた。
疑いを解きたいのだが、本当のことを言うわけにもいかないので、かなり追い詰められた状況だ。

さげすむような目をされていることに軽くへこみながらも、

「そんなことは可愛い妹に誓ってやってない。」

そうとだけ言いきった。

そうこうしてる内に朝食の用意ができたので、食べることにする。

「今日も帰るのは早いのか？」

「うんん、今日はお父さんのアパートによるから遅くなるね。」

「なんだ、またか？あのクズに会いに行く必要なんて無いのに。」

親父はとにかく最低な奴でだいぶ前に母さんと離婚した。

「お前あいつのところ寄る時いつも遅いけど、何かされてるんじゃないか？」

そう言うと彼女の肩がビクッと震える。

「おい！！まさかお前本当に！？
クソッあの野郎許せねぇ！！ブッ殺してやる！！」

「やめて、兄さん！！全部私が悪いの！！お父さんがあんなになってしまったのも、だから…。」

「あれはお前のせいじゃないって何度も言ってるじゃないか。」

「でも…。」

台所にあった包丁を掴み、玄関を乱暴に開けると、兄は飛び出していった。

「うわぁ、朝から重い番組やってるなぁ…。」

「友達が面白いって言ってたんですけど、私もこれはちょっと…。」

「消してもいいか？」

「いいですよ。」

俺達が見ていたのは、今話題の朝の連続ドラマだ。

もちろん俺達の父さんは、こんな最低野郎ではないし、現在家に居ないのは長期海外出張中だからである。

早々に朝食を食べ終わり、昼食用のサンドイッチを二人分作った後、夏々夏が脱がせてくれていたブレザーをはおり、学校に行く準備を整える。

本来ならばまだだいぶ早いのだが、九十九と二人で話をしたいので、もう家を出る。

「俺はもう行くけどお前はどうする？」

「私はもう少ししてから行きます。」

「そっか、それなら食器洗っててもらっててていいか？」

「はい、いいですよ。分かりました。」

いくら家事能力が皆無とはいえ、さすがに皿を洗うことくらいはできる。

「サンキュ、それじゃあ、いってきます。」

「いってらっしゃい、兄さん。」

学校に行く途中の交差点で、いつもの様にスーツ姿の明石（あかし）さんに挨拶をする。

余談ではあるが、俺は小学校1年生の時から彼に挨拶をしているが、彼が幽霊だと気づいたのは6年生のことである。
誰もいない所に挨拶をしている姿は周りから見て、かなり危ない小学生だったに違いない。

最後の急な登り坂を登りきると、そこが俺の通う高校である。
私立栄扇（えいせん）高校　夏々夏の通う高校とはだいぶ差があるが、そこそこの進学校である。

「しゃー、すぇー、くぅえー。」

と、よく分からないかけ声を出して練習している野球部を横目で見ながら、校舎を大きく回り、正門から一番遠くにある弓道場を目指す。

弓道場の扉を開けると、案の定九十九は一人練習していたため、集中しているところを邪魔してもいけないので隅の方にいることにした。

流れるような動作で足踏みから残心までの射法八節を行う九十九に、視線が惹き付けられる。

ふぅ、という呼吸と共に構えを解いたので声をかける。

「おぅ、九十九おはよう。」

だが九十九は来ていたことに気づいていなかったらしく、ビクッと震える。それに合わせて袴の上からでも分かる大きな胸も揺れる。

「あぁなんだ鑢坂君かい、おはよう。全く驚かさないでくれよ。来てたなら声くらいかけてくれればいいのに。」

「集中してたみたいだったから声かけにくくてな。そんなに驚かせたのなら謝るよ。」

「いや、別にそこまでしなくてもいいんだけどね。それよりも、こんなに早く来てくれるとは思わなかったよ。話は放課後にでもするつもりだったしね。」

「早い方がいいかと思ってな。あぁ、まだ続けるつもりなら、別に放課後でいいが。」

「わざわざ私のために早く登校してくれた鑢坂君にそこまでさせるわけにはいかないさ。幸い時間もまだまだあるようだしね。いいよ、何から話そうか?」

「とりあえず、俺は何も分かっちゃいないんだ。一から順に説明してくれないか?」

「分かった、そうさせてもらうとしよう。巻きこんでしまった君には聞く権利がある。…そうだね、一からというならばあそこくらいからが丁度いいだろう。」

そう言って九十九は語りだした。

03　九十九もずく　2（後書き）

早速ですが、ごめんなさい。もうわけの分からないことになっちゃってます。　とにかく頑張って軌道修正させます。

０４　九十九もずく　３

「まず、最初に私は本当に吸血鬼ではないんだ。例え長い間血を吸わなかったとしても、死ぬわけではない。しかし貧血みたくフラフラになったり、倒れたりはしてしまう。まぁその程度なんだ。」とりあえず、彼女は自分を吸血鬼だと認めようとはしなかった。

「初めて自分に流れているおかしな血について、気づいたのは小学校に入る前だった。

その頃とても仲のいい友達がいてね、今でも仲はいいんだが。…とにかく毎日のようにその子と一緒に遊んでたんだ。

その頃は折り紙にはまっていてね。いろんなものを折って二人で楽しんでいた。

そんなある日のことだよ。その日もいつものように折り紙をしてたんだが、その子が折り紙で指を切ってしまったんだ。君にもそんな経験があるだろう？

その時だ。不意に自分の中で、何か熱いものが渦まきだしたんだ。喉がカラカラに渇いて、頭がぼ～っとなってね、どうしても視線がその子の指から流れている血から離せなかったんだ。

そして、衝動に突き動かされるままに、その子の指を持って、血を吸ってしまったんだ。

終わった後で、もの凄い自己嫌悪に陥ったよ。

どうしようもなかったので母にそのことを泣きながら話すと、母は驚いた顔をしてね、すぐさまルーマニアから祖母を呼んだ。

すぐと言っても2日程かかってね、祖母が来るまでは、とてもじゃないが何かを食べる気にならなくて大変だったよ。

そうしてやって来た祖母に話しを聞くところによると、かなり昔の祖先がまさにそのものだったらしくてね、それからというものたまに、血を受け継いだ者が生まれることがあるらしいんだ。

こっちとしては迷惑な話だけどね。

まぁ今更どうのこうの言ってもしょうがなかったし、そのままにしておくわけにもいかないので、
ある程度衝動を抑えたりするような方法とかを祖母に教えてもらった。」

…どこかで聞いたことのあるような話だ。

「なぁ、そこまでは分かったんだが、ちょっといいか?その血を吸われた子はどうしたんだ?そんなことをされたら普通驚くだろ?」

驚くだけで済めばいい方だろう、妖を見なれてしまい、ちょっとやそっとのことじゃ驚かないぜ!!、みたいな自信を持っていた俺でさえ、その自信を木っ端微塵に打ち砕かれてしまったのだ。
いっぱんぴーぷるなら卒倒ものである。

「……ん、……いや、……それがだね、その子はとても、な

んというか、そう、怯えてしまってね、『ばけもの、ばけもの』とつぶやくわけさ。…それで我に帰ったこっちも自分が怖くなってね、『違う、違うの、私じゃない、忘れて、お願い忘れて』と言っていたら、……その子の目が段々と虚ろになっていってね、『……違う、……もずくちゃんじゃない、……私は忘れる。』なんてことを言って、わけが分からなくて混乱している私を放って帰ってしまったんだ。祖母に聞いた話では吸血鬼の能力の1つらしい…。」

おおぅ、いや、それはどうなのだろう。人間にはそんな能力は無いと思うのだが。
自分でも軽く認めちゃってるし…。

もしかして俺が知らなかっただけで、そんなファンタジーみたいなのは、いっぱいいるのだろうか？
エルフとか、
鬼とか、
猫娘とか、
ポストに手紙を入れたらやってくる、片目が無くて、黄色と黒のちゃんちゃんこを着た、幽霊族の生き残りの男の子とか。

さすがに最後のは居ないとは思うが…。

そんなことを考えていると、俺が彼女のことを化物とでも考えていると勘違いしたのか九十九は泣き出しそうになってしまった。

…もずくちゃん、案外泣き虫である。

世の中のほとんどの男にとって女の涙は、絶対命中、効果抜群、一撃必殺であり俺もその例にもれない。

あたふたしながら、
「い、いや、心配するな、お前のことを化物だなんて思ってないから。」
そう言うが、
「いいんだよ…、別に…、慣れてるから…。みんな言うんだよ、ふと飲んでしまった後必ず、『化物』って…。別になりたくてなったわけじゃないのに…。」
ますます落ち込ませてしまう。
「本当にそんなこと思ってないって。そ、そうだ、どのくらいの割合で飲んでるんだ?」
「大体、週一くらいかな。」
そこそこ、いや結構、いやかなり、多かった。
「あぁでも君のを飲んだから後1ヶ月は大丈夫だと思うよ。」
「は?どういう意味だ?」
「え?気づいてないのかい?…いや、それなら言わない方が…」
「何?何だよ?何なんだよ?気になるじゃん!!教えてくれよ。きになって夜も眠れなくなりそうだよ。」
「…そうかい?それなら言うが、

……君には近づくだけで妖を強くするような血が流れてるんだ。さらに、その血や器官を喰らうと、本来の何倍もの力を得ることができる。１ヶ月は大丈夫だと言ったのもその能力のおかげさ。まぁ、そうでもない限り、普通昨日みたいなのには出会えないからね。」

衝撃の事実発覚である。脳内新聞の一面を飾ることは間違いない。

そんな大事なことは言っておいてくれよ、ばあさん……。

考えてみると、いくつか思い当たることがないことも無い。

成長のないはずの幽霊である明石さんも、俺が挨拶をしていくうちに、サングラスをかけるようになったり、スーツが某有名メーカーのものになったりしていた。

「……あぁ、そういや昨日お前はなんであんなに強かったんだ？俺の血を飲んだのは、その後だったろ。」

「それも特性でね、ああいうの相手だと絶対的な力を得られるんだよ。」

なんとも反則じみた能力である。要するに、妖相手だと最強ってことじゃないか。

それよりも、さっきから自分のことを吸血鬼だと認めているようなものなのだが、いいのだろうか？

「鑢坂君、お願いがあるんだ。」

不意に九十九は真剣な顔をして言ってきた。

「…君の血を1ヶ月に一度でいい、飲ませてもらえないだろうか。もちろん代わりになるようなことなら何でもしよう。多分昨日みたいなのはまた現れるだろう。その時に君を守ってみせる。都合のいい話だというのは十分分かってる。…でも、もう嫌なんだ、誰かに化物と言われるのも、その人の記憶を消した後に何も無かったかのように振る舞うのも…。だから…。」

その時の九十九の表情は、彼女がうつむいていた上に、長い髪で隠されていて見えなかった。

「いいよ。」

気がつくと俺はそう言っていた。

九十九は、まるで狐につままれたかのような表情をしつつ顔を上げた。

「いいのかい？本当にいいのかい？ＯＫって意味かい？別に強制じゃないんだよ？」

「ああそうだよ、ＯＫって意味だよ。なんだよそんな顔して、俺がＯＫすると思ったから言ったんだろ？言っておくが、お前のためじゃないからな。あくまでお前が俺を守ると言ったからであって、別にお前の…って、あああ、とにかく、契約成立だ。」

なんだか可愛いツンデレキャラになってしまっている。

くそぅ、こんなつもりではなかったのだが。

九十九もそれが分かっているのか笑っている。

正直とても恥ずかしいが、その場の雰囲気に合わせて言ってしまおうと思う。

「今まで周りどころか家族でも視えるのがいなくてな、視えてても誰にも言えなくて結構辛かったんだ。そんなのでありたくないお前はこんなことを言われたら嫌かもしれないが、俺はお前とこんな話ができて凄く嬉しいんだ。」

そう言うと彼女の顔はみるみるうちに真っ赤になってしまった。

そんな反応をされるとこっちも恥ずかしいではないか。

「…そ、そんなことを言われるのは初めてだよ。……そんなふうに、い、言われるなら、きゅ、吸血鬼でも、……ぃぃかなとか、……と、とにかく私も嬉しいよ！！」

そう言って九十九はいきなり抱きついてきた。

お互い座って話していたので勢いをころせずに、押し倒されたようになってしまう。

ここは日本であって、欧米ではないんだ。だからそういう過激なスキンシップはもう少し抑えてくれ。

と、胸よりも下くらいにある柔らかい物体に気がいかないように現実逃避をする。

九十九は自分のしでかしたことに気づいた様子で、

「いや、こ、これはわざとではなくて、なんというか、その、ふ、深い意味があったというわけではなくて、」

弁解はいいので早くどいてくれと切望する。どいてくれないといろいろやばい。

そしてその瞬間、実にタイミングの悪いことに、弓道場の扉を開いて、弓道部顧問である蓬生（よもぎ）　凪（なぎ）が入って来た。

「おーい、九十九まだ練習してるのか？ホームルームの時間だからそろそろ上が……なんだ、お前達そういう関係だったのか。いや、だがな、そういうことは時と場所を考えろ。確かにもてあます年頃だし、こういう状況で、もえるのもわからなくはないさ。私だってそんな時代があったからな。でもな、ここは学校なんだ。さすがにまずいって。だから、まぁ、とりあえず授業には出とけよ。」

そう言って去って行った。

彼女はいつの間にか離れている。

さて、あの２７歳現在彼氏募集中の先生が、迷惑にも作っていってくれた、この微妙な雰囲気をどうしよう？

０４　九十九もずく　３（後書き）

あ～、うん、なんとか仕上がりました。自分で読み返してみて一言、「なんだよ、これ。」　感想・評価をもらえると嬉しいです。

05 one pair

九十九は着替えなければならないので先に教室に行く、と声をかけてからむかう。

教室に着いた時には、だいぶギリギリだったみたいで、数人をのぞきすでにほとんどのクラスメートがそろっていた。

自分の席へ行こうとすると、このクラスの学級委員長である椎本ひかり《しいがもと　ひかり》が声を掛けてきた。

「鑢坂君おはよう。今日はいつもより遅かったね。遅刻には気をつけないと。遅刻は不良の始まり、だよ。」

なんだかあまり関係ないような気がしないでもないが、そこはだいぶ規則のゆるいこの学校においてさえも、みつあみ、メガネ、膝丈のスカート、と真の委員長であるための三大条件を満たす彼女の言うことである。

きっとその通りなのだろう。

「分かったよ、次から気をつける。」

「ふぇ？どしたの？今日はえらく素直だね。いつもなら『うぇっへっへっ、お前のパンツくれたら考えてやらないこともないぜ。』とか言うのに。」

「そんなことを言った覚えはない！！」

何故だろう、昨日からいろんな人に貶められているような気がする。

嫌われているのだろうか？かなりショックすぎる。

「鑢坂君、いつにもましてツッコミが冴えてないよ。ここでのツッコミは『違う!!俺がほしいのはパンティーじゃなくてブラだ!!』だよ。」

「余計ひどくなった!?なぁ椎本、俺のこと嫌いなのか?泣きそうだよ。」

「泣けばいいのに。」

「ぐはっ、お前にそんなことを言われる日が来るなんて。こうなったらお前の胸に頭ぶつけて死んでやる。」

「そこまでペッタンコじゃないよぉ…」

「くれるブラもなかったりして。」

「…ふ、ふふ、ふふふ、そ、そこまで言われたのは初めてだよ。本当ならセクハラで訴えてるとこだけど、ここまで言われちゃしょうがないよね…。調きょ、じゃなくて教育しなおさないとね。」

さすがに言いすぎただろうか、椎本はブラックなオーラを出しながら、こちらへにじりよってくる。

「れ、冷静になれ。いつもの明るいお前はどこへ行った。深呼吸しろ、深呼吸『ふっふっふー』だ。」

「ふっふっふー、っ!!げほっ、げほっ。」

あ、むせた。

「もぅ、何させるんだよー。はいてばっかりだからむせちゃったよぅ。」

「やる前に気づけよ。」

なんて、いつもの様に冗談を言い合っているとチャイムがなって、担任が入ってくる。
可哀想なことに九十九は遅刻のようだ。

物事には全て始まりと終わりがある。人が生まれたのならその人はいずれ必ず死ぬ、というのは自然の摂理、宇宙の大法則だ。終わりのない物語なんて無いし、朝のこない夜も無い。
でも、本当に終わりの無いものは無いのだろうか？もしかすると、永久に不変のものだってあるかもしれない。でも、観測される方ではなく、する方が不変なわけでは無いのなら、それが不変であるとどうやって証明するのだろう。

つまるところ何が言いたいのかというと、授業はいつかは絶対に終わるということで、今は放課後である。
さあ、部活に行って固まった体を戻そう。とか考えていたのだが、未だに俺は教室にいて、箒まで持たされている。

目の前ではむすっとした顔で、同じように箒を持って掃除している九十九がいる。

「鑢坂君手が止まってるじゃないか！！全く、誰のせいでこんなことをしてると思ってるんだい。私としては早く部活に行きたいんだけどね。」

むぅ、怒らせてしまった。

というか、どうして放課後九十九と二人で掃除をしなければならないのかというと、理由としてはとても簡単で、九十九が遅刻したからである。

着替えていたため遅れて入ってきた九十九は、無慈悲なことに担任から遅刻の罰として放課後の教室掃除を言い渡された。

それだけならよかったのだが、さあ部活に行こうとしている俺のとこに九十九はやって来て、

「私が遅れたのは君と話をしていたせいだ。だから君にも掃除をする義務があるはずなんだ。」

なんてことを言ってきた。

まぁ確かにそれも一理あるな、と思い手伝っているのだが、いつの間にか彼女の頭の中では１００％俺のせいになっているようだ。

１０分程かけて掃除を終わらせた後、部活に行こうとしていたら、九十九がおもわぬことを言ってきた。

「弓道部は好きな時に帰れるけど、君は今日は何時上がるつもりだい？私もそれに合わせるつもりだが。」

「今日は7時くらいには上がろうと思ってるけど、どうしてだ？」

「ん？君を守ると約束したからね、一緒に登下校しようと思ってたんだけど。夜なんかは特に妖も出やすいし。迷惑だったかい？」

「そんなことはないけど…、家は近いのか？」

聞くと、九十九の家はだいぶ近い所にあり、彼女の通学路の途中に俺の家があった。ただ、校区が違ったため今まで一緒になったことがなかったのだろう。

「女の子に送ってもらうのは恥ずかしいので、お前の家まで送ることにします。」

「いや、それじゃ意味が無いような……、まぁいいか。そうと決まれば部活に行こうか。」

そう言って彼女は駆け出して行った。

うん、なんだかだいぶ、いやかなり、やる気がでてきた。

ゆるむ頬を軽く叩いて引き締めて、俺も部活に向かう。

05　one　pair（後書き）

最初、何が書きたかったんだっけ？

06　鉋宜神禰

九十九と一緒に下校をしたその夜、母さんは仕事だったので夏々夏と二人で晩飯を食べた後、俺は祖母に電話をかけた。

「もしもし」

「誰かと思ったら遊馬かい。なんだいこんな夜に急に？」

「ちょっと聞きたいことがあってね。俺の体質のこと婆さんは知ってたのか？」

「まったく、いつもお婆さまと呼べと言っておろうが。で、なんじゃ？視える視えないの事を言っておるのかい？」

どうやら高名な占い師兼陰陽師である祖母さえも、気づいていないようだった。実際に飲んだので九十九は気づいたのだろう。

「いや、そのことじゃなくてだ、どうやら俺は妖とか霊を強化してしまう体質らしいんだけど、婆さんなら何か知らないかと思ってな。」

「ふぁ？お前今なんと言った？」

「だから、どうやら俺の近くに居ると妖とかやばくなってしまうんだと。どうしたんだ？もう年か？」

だが祖母は俺の話など全く耳に入っていないようで、

「なんと、ありえないと思っておったがまさか本当にそうだったとは…。確かにそれらしき予兆はあったが、まさかそこまでとは。いかん、こうしてはおられん。すぐにでも手を打たんと、いいか遊馬すぐにそちらに護衛を送るからの。外に出るではないぞ。」

「そのことについてならすでに……ってもう切れてるし。」

祖母は言いたいことだけ言うと、こちらに喋る隙すら与えずに電話を切ってしまった。

おそらく分家の方の誰かから護衛をよこすのだろうが九十九もいるので、悪いが帰ってもらおう。

「兄さん、お婆さまからだったんですか?」

「そうだ、ただあっちからじゃなくてこっちからだけどな。」

「珍しいですね、兄さんがあそこに連絡するなんて。」

「妖関係の話だったからしょうがなくだよ。」

「そうですか…。私には視えないので何とも言えないですが、困ったことがあったら言ってくださいね。」

…なんて可愛い妹なのだろう。
あまりにも可愛いので抱きしめる。

「!?ちょ、に、兄さん!?いきなりな、何を。」

顔を真っ赤にして慌てふためく妹。
ますます可愛いがこれ以上はシスコンではなく変態である。
夏々夏は離した後も真っ赤な顔をさせながら、

「兄さん、スキンシップが激しすぎます。ここは欧米ではなく、日本ですよ。なんというか、…もっと恥じらいを持ってというか、…いきなりだと心の準備も出来てないですし…。」

「ああ、そういや明日くらいに居候が来るらしい。」

「華麗にスルー!?で、誰がどうして来るんですか?」

「来るのは分家の奴みたいだが具体的に誰が来るかは言ってなかった。」

理由は祖母にしたのと同じ説明をする。

夏々夏は心配しているようではあったが、まあ分家から人も来るということで納得した。

「俺はもう寝るけどお前はまだ起きとくのか?」

「私は食器を洗ってから寝ますので、おやすみなさい兄さん。」

「おやすみ夏々夏。」

さて、宿題などは既に済ませてある。これ以上何かすべきだろうか、いやすべきでない。

というわけで早々と寝てしまおう。

朝、いつもの様に早くから起きて俺は朝食を作っていた。
バイクが無いところを見ると、どうやら母さんはまた会社に泊まりのようだ。
夏々夏は少ししてから起きてきて、今はソファに座ってＴＶを見ている。

チャイムがなったのは、俺がちょうど味噌汁を作り終えた時だった。
火を止めて玄関に向かう。

玄関を開けると、そこには大きなバッグを両手に持ち、金属バットを入れておくような革製の長い筒を背中に背負った、同年代くらいの女の子が立っていた。

「あれ、もしかして神禰か？」

「あ、は、はい。遊馬さんお久しぶりです。」

そう言って彼女はニコッと笑う。

鉋宜（かんなぎ）　神禰（かみね）俺より1つ下の女の子で鉋宜家の長女である。

だが顔見知りするなど、長女としての貫禄はあまりない。

鑢坂家の分家の人間は基本的に、各々が得意とする分野で分かれている。ただそれは、代々ある一族がその名を継いでいくわけではなく、彼らが生まれた時に本家の当主によって占われ、その卦に従って分けられる。要するに、名字が一緒でもそこに両親がいるわけではない、というわけである。だからこそ余計に彼らは家族の絆というものを大切にしている。

そして鉋宜家はその中でも妖討伐を生業としている一族である。

ちなみに神禰とは最初に目のことで本家に行って以来ちょくちょく遊んだりしていた。

「まあ考えたら鉋宜が一番適任だよな。それにしてもえらく早かったな。」

「えっと、…昨日の夜に家にいたら、い、いきなり当主様がやって来て、すぐにこちらに向かうように言われて、あ、あの、朝早くからごめんなさい。」

「…それは別にかまわないけど、どれくらいいるように言われたんだ？」

「うぅ、ごめんなさい、何も聞かされてなくて、多分帰って来るように言われるまでだと思うんですけど…。」
あの婆さんならあり得ることだ。予告無しでやってくる台風のように迷惑な人なのだから。

「まぁ、とりあえず中に入れよ。飯もまだだろ?ちょうどできたとこだから、一緒に食べるか?」

「あ、はい、ありがとうございます。遊馬さんの料理も久しぶりなので、嬉しいです。」

荷物が重そうだったのでバックを持つが、背中のバット入れだけはどれだけ言っても渡そうとしなかった。

リビングでは既に、夏々夏が朝食の準備をしてくれていた。

「お、ありがとな、夏々夏。で、こちらが居候さん。」

「どういたしまして。で、そちらはもしかして神禰ちゃんですか?」

「もしかしなくても神禰ちゃんです。」

「…えっと、久しぶりだね。夏々夏ちゃん。」
「久しぶりだね。最後に本家に行った時以来だから3年ぶりくらいかな?」

夏々夏は同年代なので特に仲がよかったようだ。

「まあ積もる話もあるが飯食べながらにするか。そういえば神禰は高校はどうなってるんだ?」

「えっと、遊馬さんと同じ高校に編入することになってると思います。」

手回しの早いことだ。

鑢坂の力でないと出来ないようなことだろう。

楽しく朝食を食べ終わって、そろそろいきますかとしている時に2度目のチャイムがなった。

07 遁逅

玄関を開けた先には九十九が立っていた。

「おはよう、鑢坂君。今日もいい天気じゃないか。君と登校するのが楽しみで昨日はなかなか寝つけなかったよ。もう、準備はできているかい？そうなら、早く行って朝練でもしようじゃないか。」

…そうだった。鉋宜のことですっかり忘れてしまっていた。
しかしえらくご機嫌な九十九にそれを言ってしまうのもなんなので、黙っておこう。

「あぁ、おはよう九十九。悪いけど、まだ準備できてないんだ。入って待っててくれないか。」

「そうかい。どうやら早く来すぎてしまったみたいだね。んん、異性の同級生の家に入るのは初めてでね。少し緊張するが、お言葉に甘えさせてもらうことにするよ。」

そう、俺はあくまでうっかりしていたのだ、
今現在、我が家に退魔のエキスパートが在住していることを、
そして九十九が４分の１吸血鬼であることも。

「おじゃまします。」
「いらっしゃい。」

九十九を連れてリビングに入って最初に口を開いたのは夏々夏だった。
「兄さん、そちらの方はどなたですか？」
「昨日言ってた助けてくれた奴だよ。」
「あぁ、確か九十九さんでしたか。」
「初めてましてだね。私の名前は九十九もずくだ。気軽にもずくちゃんと呼んでくれてかまわないよ。」
「…えっと、もずくさん。それはともかく、どうして、我が家に居るんですか？」
「それは俺から説明すっ…
説明しようとした瞬間、背中がゾクッとした。
殺気がした方には神禰が冷たい目をして、立っていた。
「遊馬さん、夏々夏ちゃん少し離れていて下さいね。危ないですから。」
そう言う神禰からはいつものニヘラっとした雰囲気が完全に消えていた。
そのまま神禰は背中に背負っていたバット入れのチャックを開く。
そうして、普通なら金属バットが入っているはずの、その中から一本の日本刀をとりだす。
「妖は滅しないとですね。」

「ふん、私をあのような雑魚どもと一緒にしないで欲しいな。これでも気高き吸血鬼の血が流れているのでね。」

…お前完全に自分が吸血鬼だって認めてるじゃん。
俺があんなことを言ってしまったからだろうか。
あぁ思い出すだけで恥ずかしい。

「別にあなたが何者だろうが関係ないですよ。遊馬さんに害をなすものは排除するのみです。」

「何を言っているんだい?この私が害だって?彼に抱きしめられながら甘い言葉を吐かれた私が害だと言うのかい?それならば、2人の間を邪魔する君の方が害じゃないか?」

「…兄さんそんなことしてたんですか?変態ですね。」

事実がクラインの壺並みにねじ曲げられている。

「やっぱり一昨日の話は嘘だったんですか。」

「本当だって。みろよ、この純粋な瞳を。」

「チッ、腐ってやがる。」「お前はトルメキアの第4皇女の軍目付か!!」

「それで分かる人は、あまりいないと思いますよ。」

「それじゃ、あれだ。タヌキだ。」

「さらに分かりにくくなってます。」

仲良きことは美しきかな。なんて、二人で現実逃避をしていた。
頼むから外でやってくれ、家が壊れそうだ。
とてもそんな事を言える雰囲気ではないが。

「一撃で仕留めてあげますよ。」
そう言って神禰は少し腰を落とし、抜き身の刀を下段に構える。

「ふん、貧相な胸しかない小娘に負ける気はないね。」
そう余計な挑発をして（事実ではあるが神禰はきっと普通だと思う、九十九がでかいだけだ）九十九は、自然体のまま目を猫のように細めて、敵を認識する。
神禰に対しても絶対的な力というのは使えるのだろう。

そうして一触即発の空気から、二人が動きだそうとした瞬間、

「たっだいまー！！。可愛い子どもたちよ、今帰ってきたにょー。」

と、空気をよんだのかよんでないのかは知らないが、とにかくナイスタイミングで母親がリビングの扉をバーンと開け、入ってくる。
そのままその可愛い子どもたちを抱きしめてこようとしたが、二人揃って避けた後に夏々夏が足を掛けて転ばした。

少し同情してしまう。

見ると、一瞬前まで殺気を放っていた二人も、驚いたのか固まっている。

「うぅ、ひどいよぅ。娘が反抗期だよぅ。激務をこなしてやっと帰

ってこれたのに、誰も優しくしてくれないよぅ。」

そう言いながら、床に体育座りで『の』の字を書き出した。

「語尾を伸ばさないで下さい。まったく、女子高生じゃないんですよ。……まぁ、とりあえず、おかえりなさい。」

「うん、ただいま。…ところで、その二人は誰なの？片方は神禰ちゃんぽいけど、もう一人は知らないよ？」

そこで、止まっていた九十九が動きだした。

「驚かせてすいません。本当はもっとちゃんとご挨拶したかったのですが。私は九十九もずくといいます。遊馬さんとはあえて言うなら、…共犯者

「お前は髪が黄緑じゃないし、不老不死でもないだろ！！」

…相手の首に印を残すような関係です。」

「！？」

ああ、完全に誤解してしまっている。

「遊馬、……初孫は女の子がいいな。」

もう、つっこむ気力さえもなくなってきた。

夏々夏はいつの間にか自分の部屋に戻っているし、

神禰も誤解したのかシャットダウン状態である。

母さんは、次は男の子かなと家族計画を建てていて、
九十九はそれを笑顔で聞いている。

カオスなこの空気をどうすればいいのだろう。

考えた結果、学校に行こうと思う。

「ほら、九十九学校へ行くぞ。神禰もそろそろ再起動して、準備しろ。母さん、飯はできてるから適当に食っておいてくれ。」

「「「はーい。」」」

そう言って全員動きだす。

「そこの吸血鬼、遊馬さんに少しでも危害を加えるようなことがあったら、即座に叩っ斬りますから。」

「元からそんなつもりはないさ。私は少し血をもらってるだけだからね。」

「本当はそれだけでも許せないんですよ。遊馬さんの広い心に感謝するんですね。」

まだごちゃごちゃと二人は言い争っているようだったが、とりあえず今争う気は無いようだ。

二階で着替え終えて戻ってくると、神禰も九十九と同じ制服に着替えていた。
ただ学年が違うため、リボンの色が違う。

「さて、いきますか遊馬先輩。」

神禰がバット入れを背負いながら言ってきた。

学校で『さん』付けはおかしいと思ったようで、呼称が『先輩』になっている。

いやそんなことよりも、神禰は学校にも刀を持っていくつもりなのだろうか…。

「おい、銃刀法違反娘なぜ貴様が着いてくる。もともと彼は私と行くつもりだったはずだ。」

「うるさいですね巨乳女。私は今日こちらに来たばかりでここら辺の事を全く知らないんですよ。遊馬さんに送ってもらうのは当然のことじゃないですか。」

「二人共置いてくぞ。」

登校中、俺を挟んで両側に陣取る二人。ずっと、ちょっかいをかけ合うので非常に迷惑である。

「いいですか、所詮あなたは血を媒体とした関係でしかありません。私とは年月が違うんですよ、年月が。」

「違うね。重要なのは、その期間にどれだけ進めるかだよ。」
「もうあなたのターンは終わりです。これからはずっと私のターンです！！」

学校に着いた後、神禰は手続きがあるとかで職員室に行ったので、二人で教室に向かう。
「私だけ呼び捨てでないというのは不公平だとおもわないかい？」
「何をいきなり。別にそんなことはないだろ。」
「いや、そうだね。だからあんな小娘に。」
小娘ってお前と1つしか違わないんだが…
「よし、決めた。私は君を次から遊馬と呼び捨てにする。だから遊馬も私のことを呼び捨てにしてくれ。」
「またむちゃくちゃな…。」
「何か不満でもあるのかい？そうだね、今なら私の胸も揉み放題というのでどうだろう。」
「のった！！」
「……。」

「しまった！！なんて卑劣な罠なんだ。こんな罠を思いてくなんて、恐ろしい子っ。」

「いや、自爆のような気がするけど…。」

「…まぁ気にするな。それよりも早く教室に行こうぜ。今から部活をする時間もないだろ、もずく。」

「…え？…ちょ、今、なんて、も、もう一度。」

もずくから逃げるようにして、軽やかに階段をかけあがる。

顔が暑いのはきっと走っているからだ。

もずくの声はだいぶ後ろのになってしまった。

けれど、少しはやる気も出ただろうか。

そうして忙しい朝が終っていく。

08　椎本ひかり

神禰が来てから数日後の放課後のことである。

既に日がおちて辺りは薄暗くなっているが、俺は委員長の椎本と共に、現在、倉庫のようになってしまっている旧校舎に向かっていた。

理由は簡単で、もずくと帰ろうとしていた時に通りかかった担任に、資料を取って来るよう頼まれたからだ。

決して、椎本とあーんなことやこーんなことをするために人気の無い所に行っているわけではない。

「それにしても、旧校舎なんてものがあったなんて知らなかったな。」

「まぁ、この学校は広いからね。３０年くらい前までは使ってた校舎みたいだよ。今ではただの物置小屋だけど。」

「へー、そーなのか。何度か来たことがあるのか？」

「そうだよ。先生たちからたまに頼まれて資料を取りに行くからね。」

「どれくらいの大きさなんだ？」

「大体普通の一軒家を２つくっつけたくらいかな。大体それぞれの教室に１つの教科って感じでおいてあるよ。数学は２階の一番奥の教室だったかな。」

「よくご存じで。さすが委員長の申し子だな。」

「…何か勘違いしてるみたいだけど、私は別に委員長の申し子でも化身でも何でもないからね。そんなにやりたいわけでもないし。それに委員長が何でも知ってるわけじゃないよ。」

「そんなまさか！！椎本のお母さんは生まれる前に、白い勉強のできる象がお腹をさすって、勉強を司どる天使が告知したと言っていたのに。」

「あったことないでしょ！？そんなことされて生まれてきた覚えはないよ。なんなのよそれ、仏教とキリスト教が融合しちゃってるし。」

「まさか！！違うというのか！！委員長が委員長でなくなったら委員長じゃなくなってそしたら委員長を委員長と呼べなくて委員長に委員長としての委員長も委員長で、でも委員長は委員長に委員長を委員長で…ふうぉっ！？」

もう何がなんだかわからない。椎本にも軽くひかれながら

「大丈夫？」と心配されてしまった。

ずっと喋りながら歩いているのだが、いかんせん敷地が広いのでなかなか時間がかかる。

帰りは参考書等をたくさん抱えて同じだけ歩かなければならないと思うと、軽く憂鬱だ。せめて台車くらいあることを願おう。

「…最近鑢坂君、九十九さんとかなり仲良いよね。名前で呼びあったりしてるし。いったいどうしたのかな、かな？」

「気のせいだろ。間違いなく、お前が想像しているような関係じゃない。」

嘘は言ってない
本当のことも言ってないけど

椎本は俺の目をジーッと覗き込むようにして見ていたが、ニヤニヤしたまま顔を離して、

「そういうことにしておいてあげる。」

とだけ言ってスタスタと歩いて行く。

信じていない。
信じるとも思ってなかったが…。

そんなこんなで旧校舎に着いたが、辺りが薄暗いため非常に薄気味悪い。
いくらそういう類のものを見慣れているといっても、やはり怖いものは怖い。
まるで学校の怪談だ。無事に出られることを祈ろう。
そうやって心の中で身構えている俺に対して、椎本は全く動じていなかった。
怖くないのだろうか?てっきり怖がっているものだと思っていたが。

「委員長ってお化け屋敷とか平気なのか?」

「うん、別に怖いとは思わないよ。小さい頃から平気だったし。」

そう言って担任から渡された鍵で扉を開け、ズンズン入っていく。

案の上、ほこりと一緒に妖もいたが、形すら持てないようなのばかりで、とにかく無視して椎本に付いていく。

幸い電気は通っていたが教室には、本が文字通り山のようにあるばかりで、台車のようなものはなかった。

「旧校舎裏に倉庫があったて、そこに確かあった気がするから、鑢坂君取って来てくれない？私はその間に持っていくものをまとめておくから。」

「わかった、校舎裏だな。」

そう言って俺は校舎裏に向かう。

だが途中で、鍵を渡してもらってなかったことに気づいき、奥の教室に戻る。

こういう時、小説やテレビなどだと決まって教室に友達がおらず、何故か校舎からも出られなくなっていて、1人で校舎の中をさ迷うものである。

けれども、この世界は小説やテレビのような虚構の世界ではないので、そんなことはなかった。

ただ、それよりもありえないことが起きてはいたが…。

明りの着いた教室には椎本と、大量の本と、巣食っていた小さな妖がいるだったが、扉を開けた俺は、愕然、呆然、茫然、唖然、全てを合わせたような状態になってしまった。

…椎本は妖を食べていた。まるで綿菓子をちぎって食べるかのごとく自然に。

……はぇ？

……ほぇ？

「ん？鑢坂君どうしたの？」

こちらに気づいた椎本は何事も無かったかの様に振る舞う。

当然と言えば当然だろう。妖が視えない人には椎本が口を動かしているようにしか見えないのだから。

けれども、椎本にとって唯一にして最大の計算違いは、俺が視える人だったということだ。

「…いや、委員長何喰ってんだよ。」

「ん？なんにもしてな……あれ？なんで食べてるって？あれあれ？…え？」

混乱している。混乱の極みだ。

そうしてある程度混乱した後、

「……うー、そういうことですか。鑢坂君、視えちゃってるんだ。やっちゃったねー。」

やっと理解した。

「ここにはいっぱいいるからたまに来てたんだけど、まさか、ばれちゃうとは…、不覚。」

「いや、不覚って。ていうか何故食べてるんだ?腹壊すぞ。」

「ツッコムとこそこじゃないって普通。まあ、お腹は壊さないけどね。……私、妖からでしか栄養を取ることができないんだ。普通にご飯を食べても栄養にならないし、味もしない、びっくりでしょ?妖を食べなかったら生きることができないの。普通の人は視えないから、目の前で食べてても変なことをしてるふうにしか見えないけど、まさかこの学校に視える人がいたなんて、ねぇ。」

友達と一緒に弁当を食べたり、外で食べたり、ご馳走してもらったりと、誰かと何かを食べる機会はたくさんあり、何も感じなくてもおいしいと言わないといけない。

それはきっと辛いだろう。だからといって分かったふりをして、慰めるなんてことは馬鹿にするだけだ。俺には分からないのだから。

だから、俺が言っていいのは、これだけなのだろう。

「生は気をつけろよ、毒持ってるかもしれないしな。」

それにしても俺も含めて、この学校には変な体質の奴が多すぎる気がする。

それから俺は台車を取ってきて（鍵は必要なかった）、大量の参考書等を積め込み、旧校舎を後にする。

もずくと神禰は先に帰らせていたので夜道を2人で帰る。椎本は電車で通っているので駅までの途中、いろんな話をした。妖はどんな味がする、とかそんなにたくさん食べなくてもいい、とかそれから俺の体質についても。

椎本曰く、一概には言えないが、大体が強くなればそれだけ美味しくなるらしい。

「だから今日のはいつもより美味しかったんだ。なるほど。」

「俺には分からないよ。」

「食べてみる？」

「遠慮しとく。」

「あははっ、だろうね。」

ちょうどそこで駅に着いた。

さよならを言って、さぁ帰ろうと歩きだしたところで呼び止められた。

「なんだ？」

「ん、えっとね、やっぱり人って美味しいものが食べたいもねでしょ。」

「まぁそうだけど、それで?」

「また手伝ってくれると嬉しいな、なんて、ダメかな?」

「いいよ、いつでも言ってくれ。委員長にはお世話になってるからさ。」

「えへへ、ありがと。じゃあね。」

「ん、また明日な。」

そうして別れて家に向かう。
その途中で不意に寒気が走った。おそるおそる振り向くと、そこには妖ではなく、もずくがいた、…般若の顔で。
…どうやら、先ほどからの殺気はもずくからでているようだ。…はんぱなく怖い。

「…ど、どうしたんだ?顔が、お、恐ろしいことに、な、っているみたい、だけど。」

ようやく絞りだした声も震えて裏返っている。

「…どうして君は私を置いて帰っているんだい?それも、ひかりちゃんと仲良く2人で。」

ひかりちゃん?あぁ委員長のことか。

「さ、先に帰ってて、くれって、言ったような。」

「私は危ないから待っていると言ったよ。どうやら君の頭の中にはひかりちゃんと2人きり、ということしかなかったようだね。」

視線で人が殺せるのなら、間違いなく、俺は今殺されているだろう。

「そんなつもりは、無かったんだけど。…悪かった、どうすれば許してくれる?」

「血」

「…いや、この前もやったような。」

「今の君に拒否権は一切ないよ。」

「…あー、…了解。」

そうして、フラフラになって帰る俺だった。

あいついつもより３０％増し（当社比）で飲みやがった。

08　椎本ひかり（後書き）

遅くなりました。すいません。

09　魚肉ソーセージ

ゴールデンウィークとはもともと映画界での業界用語だったらしく、興行利益が一番とれる時期だったので名前がついたらしい。ちなみに文化の日を中心とした連休はシルバーウィークと言ったらしい。

とりあえず、そんなこんなで現在ゴールデンウィークである。

学校だけでなく、弓道場の改修工事で部活も休みである。

休みであっても関係なく、いつもの癖で朝早く起きると珍しいことに、夏々夏と神禰が既に起きていた。

「ん？おはよう、珍しいな、お前たちが休日に早きなんて。」

「…あぁ、兄さんおはようございます？」

「何で疑問系なんだよ…」

「いえ、折角の休みでしたので神禰ちゃんと2人でゲームをしていたらいつの間にか…。」

「そ、そうか、それは大変だったな。」

よく見ると神禰は目を開けたまま、意識が飛んでいってしまっているようだ。

「…ぅう、眠いです。」

そう言って夏々夏は自分の部屋に行ってしまった。

ダメ人間たちの行く末は心配だが、とりあえず朝御飯を作ろう。

意識が戻ってきた神禰と朝御飯を食べ、神禰も部屋で寝た後、冷蔵庫の中身が無かったことを思い出し、買い物に出かけた。

スーパーに行く前に、欲しかった小説がでていることを思いだしたので本屋によると、そこには私服姿の椎本がいた。
休日なので私服は当然かもしれないが…。

「よう、委員長。」

「ん？鑢坂君だ。やっほー。」

「やっほー。委員長は何を買いに来たんだ？わざわざ電車使ってこの本屋まで来たんだろ？」

「えっとね、ここの本屋は大きいから近くの本屋には売ってない参考書があるんだよ。そういう鑢坂君はエッチな本でも買いに来たのかな？」

「違うって。連載ものの小説が出てたから買いに来ただけだよ。」

「なるほど、連載ものの官能小説が出たので買いに来たと。」

「お前は俺のことを何か誤解してる！」

「いいんだよ、分かってるから。」

「何一つ分かってないって！」

「まあとにかく、少しは勉強もしておいた方がいいと思うよ。休み明けはすぐテストだからね。」

「…そういや、そうだったな。」

「成績上位者の鑢坂君には余計なお世話だったかな？」

「そんなことないさ、教えてくれてありがとな。」

「いいよ、別にお礼なん…あ、そうだ。この後暇？」

「ん？別に急ぎの用事は無いけど…。」

「そうですかそうですか、暇ですか。それならお礼ということで、…デートをしませんか？」

「は？今なんて。」

「だから、デートしようって。」

椎本の言った言葉が頭に入って来ない。いや、入っては来るのだが処理ができていない。

混乱したままの脳内で『デート』を変換する。

…
…
…
デート
ｄａｔｅ
日付
日付しよう。

全く意味が分からない。

「だーかーらー、一緒に買い物に行こうって。これで通じた？」

「いや、通じてはいたけど理解ができなくて。」

「何？私とデートするのが嫌なの？」

「嫌とかそういうことではなくてだな…」

「よし、じゃあ行こう。レッツゴー。」

そう言って人の話を一から十の一も聞かずに、俺の手を引っぱっていく。

あぁ…まだ本買ってないのに。

椎本に案内されるがまま付いていく。

「光栄に思ってよね。私からデートに誘うことなんて滅多にないから。それこそ戦隊ものの悪役が出てくる位の割合だからね。」

「週一じゃねーか！…ん？毎日なのか？あの中での時間軸ってどうなってんだ？……いや、どうでもいいか。それよりも椎本、デート初めてじゃないんだな、ちょっと意外だった。彼氏もいたのか？」

「当たり前じゃん。高2だよ、青春だよ、友達１００人できるかな位でいるよ。」

「いるよって、９９股じゃん。まぁ建前はわかった本音は？」

「1人もいたことありません。初デートっす。」

「なに無駄な見栄はってんだよ。」

「いいじゃん、これでも結構緊張してるんだから。」

「…ん、あぁ、まあ、そうだな。」

なんとなく強くでることができない。

周りを見渡すと、いつのまにか街の外れの方にまで来てしまっていた。

「なあ、どこまでいくんだ？こっちの方には何もないだろ。」

「あるんだよね、それが。まあ、もうすぐだから。」

そう言ってさらに１０分程歩くと、それは見えてきた。

「ふっふっふっ、どうだ。前から目をつけてたけど、1人で来るのもあれだったんだよね。まさに渡りに船、いや旅客機だよ。」

「……なぁ、もう帰っていいか？」

そこにはテレビの心霊特集に出てくるような、いい感じに寂れた病院があった。

ここで一つ言っておくが、俺は妖を見馴れているからといって、お化けとか幽霊の類が怖くないわけではない。ホラー映画を見ればもちろん少しはびびる。

だからいくら昼間だからといって、こんなところに入るような物好きでは決してない。

そんな俺へ、死神が大鎌を振るうように最終勧告が告げられる。

「さぁ行こうか。あれ、行かないのかな？別にいいんだよ、みんなに鑢坂君から廃墟に連れこまれて襲われた、って言うだけだから。」

…何て恐ろしい奴なんだ。

その廃墟と化した病院でたらふく妖を食べて満足した椎本は、あんなところに長く留まっていると、妖たちが力を得てしまい大変なことになるという（九十九から聞いた事だ）俺の主張を受け入れて、早々にその場を後にしてくれた。

その後は繁華街に戻って、それこそデートのようなことをして2人楽しんだ。

それから、昼過ぎ位に椎本は用事があるとかで帰ってしまったので、当初の予定通り本を買ってスーパーへ向かう。

割とすぐ近くにあるスーパーは昼間ということもあって、人はそこまで多くはなかった。

そうして意気揚々と家に帰る途中のことである。

住宅街に入って何本目かの角を曲がると、そこに人が倒れていた。

…は？

いや、ちょっと待て。

人は普通道路に倒れているだろうか、いやそんなことはない。

反語を使ってみた。

反語ばんざいだ。

現実から目を背けて別の道を通りたいのだが、生憎そうするとものすごく遠回りになってしまう。しょうがないので大きく距離を開けながら、気づいてないですよ、という風にして通る。よく見ると倒れていたのはおそらく３０過ぎくらいのおっさんで、体形はだいぶスラッとしていて、スーツ着用で、まともにしていれば格好いいだろうな、という感じではあったが、道端に倒れていることがまともなことではない。

何故か、髪が青色だった。真っ青である。

やっぱりまともな人ではないと判断する。

足音をたてずに息を止めたままだが、しかし出すことのできる限界のスピードで通り抜けようとした。

そうして後少しで通り抜けられる、という瞬間、

「おい、そこの兄ちゃん、食べ物を恵んでくれないか。」

特に何も起きなかったので、そのまま過ぎ去る。

「お、おい兄ちゃん、待ってくれって。少し、少しでいいんだよ。食べ物をくれないかい。ここしばらく何も食べてなくてな。」

…何も聞こえない。

「あ、おい兄ちゃん。ちょ、まじで行かんといて。ちゃ、ちゃんとお礼はするって。」

あー、今日はいい天気だな。明日も晴れないかな。久しぶりに大掃除でもしよう。

「……。

この団地の皆さーん。ここに困っている人を見ても、無視してたち去る冷たい兄ちゃんが…」

「てめぇ何言ってやがんだ！」

相手が大人だろうが構っていられなかった。

いや、まともな大人は道端に倒れてはいないが。

「いやぁ、やっと気付いてくれたね。あのままたち去ってしまうのかと思ったよ。」

「…そのつもりだったんだよ。てかあんた…」

「とりあえず、何か食べ物をくれ。」

「人の話を聞け！」

しょうがないので、買って来たばかりの魚肉ソーセージをわたす。

「ありがとう、心の友よ。」

「あんたと友達になった記憶はない。」

「いいじゃないか、人類皆兄弟だ。」

「友達じゃないじゃん。」

「……はっはっはー。」

だめだ、この人だめ人間だ。

「それにしても魚肉ソーセージか。もっといいものが食べたいな。」

「文句があるなら返せ。」

あげたソーセージをあっという間に食べてしまったそいつは俺に一枚の名刺を渡して言った。

「助かったよ兄ちゃん。君にこれを渡しておくから困ったことがあったらすぐに電話してくれたまえ。魚肉ソーセージ分は働くよ。」

そうしてすぐに立ち去っていった。

なかなか根にもつタイプのようだ。

二度と会いたくないタイプでもある。

テンションが下がったまま家に帰りながら、渡された名刺を見てみる。

そこには、職業と名前しか書かれていなかった。

ヴァン・ヘルシング

賢木（さかき）　右凰（うおう）

さらに、テンションが下がってしまった。

てか、電話番号が書かれていないのに、どこに電話しろと…。

09　魚肉ソーセージ（後書き）

だいぶ遅れてすいません。次は頑張ります。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9601g/

吸血鬼な彼女

2010年10月17日04時31分発行